

「咸水歌」の変遷と「水郷文化」の創出 — 広東省中山市の事例 —

文化科学研究科・地域文化学研究専攻 長沼 さやか

「咸水歌」の変遷と「水郷文化」の創出

— 広東省中山市の事例 —

文化科学研究科・地域文化学研究専攻 長沼 さやか

本報告は、人民共和国成立以降の中国広東省中山市において、水上居民の民謡である「咸水歌」がどのような変遷をたどり、改革開放以降の「水郷文化」の創出に結びついていったのかを明らかにする。なお、報告内容は、発表者が海外フィールドワーク派遣事業を利用し、2005年12月末から2006年1月にかけて、中山市において行った実地調査のデータにもとづいている。

水上居民とは、船上生活者を示す中国語の語彙である。かつて広東では「蛋民」と呼ばれ、陸上民から差別されることもあった。その蛋民の民謡とされてきたのが「咸水歌」である。蛋民の分布は広東省全域に広がっている。それゆえ咸水歌も、広東省のさまざまな地域で聴かれる。即興で感情や生活の状況を表した咸水歌には、定まった歌詞はない。音律もそれぞれの地域の方言に左右される。このように多種多様な咸水歌であるが、現在もっともよく保存されているのが、広東省中山市である。

中山市は、珠江デルタの最下流域に位置している。上流から開発されてきた珠江デルタではもっとも遅く、1930年代に本格的な農業開拓が進められた。その際、労働の主力となっていったのは、珠江流域各地から船で流れ着いた水上居民、現地語でいうところの「水上人」であった。現在、市民の半分以上は水上人の末裔であると言われ、彼らの住む農村部は「水郷」とも称される。水郷の風俗習慣は「水郷文化」と言われ、咸水歌はそれらの表象となっている。

中山市民には非水上人、すなわち陸上人の末裔も含まれる。おもに県城（市政府所在地）に住んでいる「本地人」や、市の南部に住んでいる「客家人」である。彼らを代表するのが、革命の父・孫文の故郷という中山市のもうひとつの顔である。そもそも中山という地名は、当地出身の革命家、孫文（孫中山）にちなんで名づけられた。孫文は客家生まれの華僑であった。ゆえに、中山市は偉人の故地、あるいは華僑の故郷としての都市像を、積極的に発信してきた。現在、こうした従来のイメージに加えて、新たに水郷というイメージが創出されてきている。

水郷というイメージが積極的に語られるようになった背景には、咸水歌の復興とブランド化があった。咸水歌がもともとポピュラーな民謡であったことは、1950年代以降、共産党の政治思想スローガンに利用されてきたことから明らかである。文革期には糾弾的となる不運もあったが、1979年に名誉回復し、市の文化局による保存活動を経てからは、文化復興の波にも乗った。さらに現在では、観光資源としても注目され、中山市、ひいては珠江デルタを代表する民謡となりつつある。

本報告では、中山市における咸水歌の変遷と復興が、どのような政治背景で行われ、現代の水郷文化の創出にいかに関わりついていたのかを明らかにする。かつて周縁に置かれ、陸上人から隔てられた存在とされてきた水上人は、民謡のブランド化をどのように認識してきているのか。また、為政者による水郷文化創出の動きのなかで、一般の人々の「水上人像」はどのように変化してきたのか。これらの問題点を明らかにする。